
銀河英雄伝説異聞 皇帝ヤンのお話

お富

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀河英雄伝説異聞 皇帝ヤンのお話

【Nコード】

N25650

【作者名】

お富

【あらすじ】

民主共和制の英雄ヤン・ウエンリーは、無事に皇帝ラインハルト・フォン・ローエングラムとの和平を成立させ、エル・ファシル自治領で念願の引退生活を手に入れた。

しかし、皇帝の病死という緊急事態が、彼を歴史の表舞台に引っ張り出す。あるうことが、病床の皇帝ラインハルトに、ローエングラム王朝第二代皇帝の地位を押し付けられてしまったのだ。

民主主義者でありながら専制君主という矛盾に満ちた立場で、ヤンは最善を探っていく。

とんでもない設定を、もしかしたら有り得たかもと思っていただけるよう、こじつけと辻褃合わせに頑張ります。

緊急連絡という名のプロローグ（前書き）

もしも、ヤン・ウエンリーが謀殺されなかったら………

そんな願望を形にしてみました。銀英伝ファンの皆様に送ります。
ヤンに皇帝をやらせようなんていう無茶な設定ですが、一応、原作
重視です（笑）

緊急連絡という名のプロローグ

新帝都フェザーンから超光速通信が届いたのは、惑星エル・ファシルの標準時で午後四時をまわったころだった。

相も変わらず書類戦争に明け暮れていたアレックス・キャゼルヌは、いつもの定時報告かと思いつつも、大型スクリーンと向き合っていた。なんとと言ってもフェザーンには、今、ヤン・ウェンリーが居るのだ。おざなりにはできない。

「ああ、キャゼルヌ君、そちらは変わりないかね」

人当たりの良い挨拶を送ってきたのは、一見すると好々爺だが筋金入りの政治家でもあるエル・ファシル共和自治政府主席、ホワン・ルイだった。

「今、君一人かね」

「はい、そうですが。召集をかけますか」

「いや、今はいい。ちょっと問題が起きたのでね、まず君に承知しておいてほしいのだが。君の判断で必要な人物に伝達してくれば良い。どのみち、すぐに帝国から公式発表があるだろうからね」

キャゼルヌが眉をひそめた。

「ヤンの身に何かありましたか」

「いや、彼は健康そのものだよ。命に別状はない。ピンシヤンしたものだ。ただ、政治生命の方は、瀕死の状態なんだが……」
キャゼルヌの表情がますます厳しくなった。悪い予感が、団体で押し寄せて来る。

そもそも今回のフェザーン行きは、アクシデント続きだった。

突然決まった皇帝ラインハルトの結婚式。

これには、日程の都合上というもつともな理由で、参列せずに済んだ。フェザーンは遠すぎて、どんなに急いでも間に合わなかったのだ。

その代わりという意味を込めて皇子誕生の祝賀使節をエル・ファ

シルから送ることになったのは、儀礼上当然の配慮と言えた。帝国と共和自治政府の力関係を考えれば、ホワン・ルイ主席自身が出向くのも、これまたごく自然な成り行きだ。

ところが、そこにラインハルト直筆の招待状が割り込んできた。もちろん、宛先はヤン・ウエンリーその人。

本来なら『退役した元軍人で今はただの一市民』である人物が、政府の公式使節に加わる必要も権利も義務もないはずだ。そう突っぱねてやりたいのは山々だが、相手が相手である。皇帝ラインハルトを怒らせるのはマズい。そりやもう、共和自治政府が惑星ごと吹っ飛んでしまいかねないほどマズい。

その上肝心のヤン本人に、招待を受けたいと希望を表明されると、引き止めることのできる者は誰もいなかった。俗に言うヤン・ファミリーの面々は、結局のところヤンの意思が最優先だったし、エル・ファシルの政府高官たちは、ヤンを皇帝の鼻先にちらつかせて、なんとか利益を得ようという魂胆でいたのだ。

残る懸念は、ヤンを謀殺しようとするテロの危険だった。

皇帝とその側近たちは信用できるが、不特定多数の帝国人の中には、ヤンを敵視している者が数え切れないほどいるに違いない。いや、旧自由惑星同盟で権力を握っていた俗物どもの方が危険かも知れない。

帝国側からミュラー上級大将率いる艦隊が派遣されてきたときには、渋々ながらもヤンの身柄を預けるしかなかった。いまましいことこの上ないが、それが一番安全だと分かっていたからである。ヤン艦隊はエル・ファシル自治政府成立の交換条件としてすでに解散していたし、最低限の軍備として許可された惑星警備隊の戦力では、フェザーンまでの長旅を警護するには、貧弱すぎたのだ。

そんな諸々の事情を思い起こして、キャゼル又は最悪の事態を想定してみた。

「もしかして、せつかくの皇子が死産だったとか。それで皇帝の機嫌が最悪なのは」

ラインハルトも人の子だ。初めての子供がダメだったとなれば、すぐ膝元に居る元敵将に八つ当たりしてもおかしくないだろう。皇帝妃が死亡したということもありうる。若い彼には相当なダメージに違いない。

「いや、母子ともに元気だよ。すこぶる順調だ」

「では、フェザーンでクーデターでも起きましたか。ヤンを担ぎ上げて利用しようとする者がいるのでは」

スクリーンの向こうで、ホワン・ルイが軽く息をついた。

「違う、と言いたいところだが、当たらずとも遠からじだな」

たちまち、キャゼルヌの表情が険しくなった。

「クーデターの首謀者は誰です。規模は。帝国軍の動向はどうなってますか」

「首謀者、と言っているものかどうか……とにかく、これは一種のクーデターになるのかな。どうにもおかしな図式なんだがね」

「もったいぶらないで教えてください」

「皇帝だよ」

「は？」

「だから、皇帝が首謀者なんだよ。何を血迷ったものか、皇帝ラインハルトが、ヤン元帥を皇位継承者に指名しておるんだ。まったく前代未聞の珍事じゃないかね。ヤン元帥といえば民主共和制の守護神だよ。その彼に二代目の銀河帝国専制君主の座を押し付けようと言っただからな」

キャゼルヌが固まった。実に彼らしくないことだが、頭の中が真っ白になってしまったのだ。

「ちょっと、ちょっと待ってください。何だってそんな必要があるんです。皇太子が生まれたばかりでしょうが」

「確かに。しかし、生まれたばかりの赤ん坊に皇帝は務まらないだろう。まさか皇子の誕生祝が、皇帝の病気見舞いになるとは予想もしていなかったが。皇帝ラインハルトはヤン・ウェンリーを自分の

後継者にするつもりだ。リスクの大きい賭けだが、勝算有りと見たな。ま、そういうことだ。このこと、承知しておいてくれ。では、また後で連絡するよ。多分、ヤン元帥本人からも連絡があると思うが、よろしくな」

最後の最後に、想像もしていなかった言葉の連続爆撃を受けて、アレックス・キャゼル又は生まれて初めての茫然自失状態に陥っていた。

第一話 使節団

宇宙歴801年、惑星フェザーン。

ベルンカステル・ホテルの一室で、退役元帥ヤン・ウエンリーが小さくもない声でばやいていた。

「せっかくフェザーンまで来たのにな。散歩の一つもできないなんて、息がつまってしまつよ。そんなに私は危険人物に見えるのかねえ」

窓の下を見下ろせば、ぼやきの原因どもが一山、たむろしているのが見える。平穏な市街地には場違いな、完全武装した帝国軍陸戦隊の兵士だ。

「状況が状況ですからね、仕方ないと思いますけど」

ユリアン・ミンツが溜息交じりに応じた。

「状況、か」

ヤンも、これまた溜息をついた。

「暇でお困りになったことは無いでしょう。ホテルで大人しくしていらっしゃるんですな」

護衛と称して着いてきた、退役中将ワルター・フォン・シェーンコップが言った。

「もつとも、どうしてもとおっしゃるなら、お出かけできるように実力で障害物を強行突破して差し上げますが」

物騒なジョークに、文官達があからさまな動揺を示した。薔薇ロゼンの騎士リッターの勇名は、彼らをしてジョークが現実になるのではないかとの危惧きくを抱かせるのだ。

もともと今回のフェザーン訪問は、アレクプリンツ・アレク大公誕生を祝賀するための平和使節だった。使節団の団長はホワン・ルイ、現エル・ファシル政府主席である。

ヤンとしては同行する必要を感じなかったのだが、つい、皇帝ラインハルトと会うという誘惑に負けてしまった。まさか誕生祝いが

病気見舞いに化けるとは、予測できなかったのだ。

「御好意はありがたいが、遠慮しておいた方が良さそうだ」
サラリとヤンがいなした。シェーンコップが肩をすくめる。

使者が訪れたのは、そんな時だった。

「元帥お一人で、とおっしゃられる？」

確認したシェーンコップの口調は、不気味なほど迫力に満ちていた。それでもたじろがなかったところは、シュトライト中將も見上げたものであつたらう。

一悶着ひとちやんちやく起きそうな気配を察して、帝国側にどう認識されようと使節団団長には違いないホワン・ルイが、口をはさんだ。

「では、仮皇宮への道程を護衛させていただきます。一名程度なら御許可いただけるものと思えますが」

徒歩十分では、道程というほどのものでもない。しかし、政治的意義というものは、時に馬鹿馬鹿しいこだわりを必要とする。そのあたりを十分承知しているシュトライト中將が、どこか朗読調で応えた。

「了承いたしました。どなたが御同行なさいますか」

「では、ユリアン・ミンツを」

すかさずヤンが言った。ここでシェーンコップを連れていったら、それこそ爆弾を抱えて行くようなものだ。

恨めしげな元部下の顔を無視して、ヤンはユリアンと共に、迎えるのランドカーに乗り込んだ。

ヤン・ウェンリーに対し、民主共和制の勢力圏で自由な生活を保証する。

それは、帝国にとって許容範囲ギリギリの妥協だった。

なにしろ、ヤンは立派な前科と実績があるのだ。平穏な市民生活を送っているという事実くらいでは、とても安心などできはしない。それでもヤンにそれが許されたのは、帝国にラインハルト・フォ

ン・ローエングラムという太陽があつたからだ。皇帝に寄せられる絶対的な忠誠と信頼が自信となり、強者の余裕を生んでいたのである。

しかし、皇帝が病床に伏し、誠に不敬ながらお命も危ぶまれる事態となつた今、帝国側に寛容を示すだけの余裕を望むことは不可能だった。

旧同盟軍略式礼装を着用した二人が通されたのは、謁見の間ではなく皇帝の寝室だった。異例なその対応だけで、皇帝の病状がどれだけ深刻か、周囲へ認識させるのに充分だった。

先日来闘病生活を送っているベッドの上から、ラインハルトは遠来の客を迎えた。近習エミール少年に手伝わせて、体を起こす。その間に、皇帝高級副官シュトライト中將がヤンの同行者ユリアン・ミンツについて報告した。

「独断ではございますが、入室を許可したこと、お許しいただきとついでにいます」

かつてのゴールデンバウム王朝では、考えられぬ無秩序である。

皇帝の御座所に立ち入るためには、身分や立場によつて詳細に資格が規定され、儀礼という名の様々な規制と手続きが必須とされていたものだ。

「構わぬ、気にするな」

軽く言い置き、ラインハルトは改めて二人に挨拶の声をかけた。

「良く来てくれた。久方ぶりであるな」

「はい。この度の皇子御誕生、まずはお慶申し上げます」

当たり前障りのない会話が続き、まるで古くからの友人同士のような和やかさが漂った。

「シュトライト、王妃と元帥達をここへ。構わぬが、ヤン元帥」

ユリアンの入室を許可してもらった手前、断ることはできない。

「はい、もちろんですが……」

まるでいたずらを企んでいる少年のようなラインハルトの表情に、

ヤンは、ふと不安に近い戸惑いとまどを覚えた。しかし、それ以上に好奇心が勝るまさ。

ほどなく、皇妃ヒルデガルド・フォン・ローエングラムと三人の元帥が入室してきた。さして広くない寝室は、満員との感がある。

軍務尚書オーベルシュタイン、帝国宇宙艦隊司令長官ミッターマイヤー、そしてノイエラント総督ロイエンタール。

帝国の要人達を前にして、ユリアンは緊張の度合いを深めた。

「少し、話しておきたいことがあるのだ。余の死後のことについてだが」

顔ぶれが揃ったところで、ラインハルトは徐に話し出した。

第二話 後継者候補

「少し、話しておきたいことがあるのだ。余の死後のことについてだが」

顔ぶれが揃ったところで、ラインハルトは徐に話し出した。

「陛下……………」

「そのような顔をしなくても良い、ミッターマイヤー。余は別に気弱になつてはおらぬ。だが、後継者をはっきりさせておくことも皇帝の務めだ」

ラインハルトが常に意識する反面教師、フリードリヒ四世がその務めを果たしていたなら。リップシュタット戦役はまた違った様相を見せていたに違いない。

「そうであるう、オーベルシュタイン」

「さようでございます」

無機質な声が響く。その顔には、何の表情も現れてはいなかった。「ですが、すでにアレク大公が御誕生なさっております。皇位継承に関しては、何の問題もございません」

「不都合だ」

ラインハルトは、一言でオーベルシュタインの言葉を切り捨てた。「オーベルシュタイン、卿は、生後数ヶ月の乳飲み子に帝国を支えろと申すのか」

「なれば、御成人なされるまで摂政を立てればよろしいかと」

「わが息子に傀儡になれと？ 醜悪だな。そうでなくとも、余は実力を伴わぬ者に帝位を譲るつもりはない。ただ血統のみで継承される王朝など、おぞましい限りだ」

叫びにも似たその言葉は、血統によらずして即位したラインハルトにのみ許されるものであつたらう。

ラインハルトはオーベルシュタインから視線を外し、一同を見渡して、改めて口を開いた。

「ローエングラム王朝の成立からまだ日が浅い。人類の統一も、平和の到来も、一夜の夢ではじけてしまふ危うさを抱えている。よほど実力ある者が上に立たぬかぎり、社会の安定など望むべくもない。そうであるが」

それぞれが、性格に応じた表情で肯定を示した。

「ヤン元帥、卿に尋ねる。第二代の皇帝は、どのような条件を満たすべきだと考える？」

皇帝の下問を、ヤンは第三者からの客観的な意見を欲しているのだらうと受け取った。そのまましばらく考え、誠意をもって応えた。「そう、ですね。同盟、いえ、ノイエラントと帝国本土の協調と融和を図り、憎しみや無理解と戦わなければならない。それは兵を指揮し戦場で武勇を誇るより、はるかに困難で苦しい戦いになるでしょう。求められるのは、人々の納得を取り付けていける政治手腕と人望です。思いついた政策をとる大胆さも要りますね。新しい人類社会を構築していただくだけの戦略眼が欲しい。理論だけでなく、現場を知っていて欲しい。それに平和を維持する守勢の人でなくてはならない。即戦力になる経験豊富なベテランと言いたいところですけど、またすぐ代替わりするようでは社会が安定しませんから、そこ若くないと困ります」

矛盾しあう条件を並べ立て、ヤンは一度口をつぐんだ。一息入れて、話し出す。

「これだけの条件を全て満たすことは不可能です。奇跡に近い。妥協が必要になるでしょう。どの要素を重視するかで、人選も決まると考えます」

「確かに奇跡だな。しかし、妥協するつもりはない。条件に当てはまる者が一人だけ居るではないか。余は、実力と名声を兼ね備えた後継者を得られたことを幸いに思っている」

ラインハルトの視線を正面から浴びて、ヤンはびっくりした顔になった。知将と呼ばれる人物にしては、ずいぶん素直に表情に出ている。帝国側のメンバーは、軽い違和感を覚えた。

「驚きました。陛下がそこまでロイエンタール元帥を買っていらっしやるとは。どうも認識不足だったようです。失礼しました」

ペこりとロイエンタールに頭を下げた。

「とぼけるな！」

ベッドから鋭い叱責が飛んだ。

「は？」

ヤンは、なぜ怒鳴られたのか全く分かっていなかった。帝国側は、ヤンの戸惑いを理解していなかった。

ユリアンが慌ててフォローした。おそらく、事態を正確に理解していたのは彼だけだったろう。

「提督、皇帝は、提督を後継者として指名なさったんです。ロイエンタール元帥のことではありません」

「はあ？」

ヤンは二三度目を瞬かせて、ゆっくりラインハルトへ向き直った。

「あの、そうなんでしょうか」

半信半疑という声に、ラインハルトは呆れ顔で応じた。皇帝としての表情を保つ気にもなれない。

「本当に分かっていなかったのか」

「ちよ、ちよっとお待ちください。そんな無茶な」

第三話 説得、あるいは脅迫（前書き）

この話は銀河英雄伝説の二次創作です。ついでに同人誌の再録です。原作を知っていると、いう前提で書かれてたりします。

原作を知らない方が読んでも分かるように、少々解説してみた地の文を加筆しました。

知ってる方から見れば蛇足だろうし、知らない方から見れば説明不足で分かりづらいんじゃないかなとは思いますが、これがお富の精一杯（笑）

第三話 説得、あるいは脅迫

「どこが無茶だ」

「だって、だってですわね、私が即位なんてしたら、誰も納得しませんよ。それこそ有名無実になって、社会が混乱します。内戦状態になるかも知れない」

「卿以外の誰が即位しても、内戦の危機は避けられまい。卿ならば、最小のリスクでそれを平定できるであろう」

ポンポンと続いていた会話が、パタリと途絶えた。

確かに、問題が戦場に限定されるなら、ヤンに肩を並べる者はラインハルトを除いて存在しない。

「……………それは……………私に、戦争の才能があるのは認めます。しかし、私にあるのはそれだけです。政治なんて、とにかく無理です」

「ほう、では、エル・ファシルに自治政府を成立させた政治手腕も、民主共和主義者を糾合した人望も、自由惑星同盟政府と余の目を盗んで『動くシャードの森』を組織した大胆さも、みな幻だと言うのか」

病人とは思えない力強い追撃に、ヤンは明らかに劣勢に追い込まれた。それでもあつさり敗退するわけにはいかない。不敗の二つ名は伊達ではないのだ。

「民主共和主義の枠内での人望です。それだって、作られた虚像にすぎません。そんなものでも、利用できるものは利用しなきゃどうにもならなかっただけです。それに皇帝になったら、専制主義に転向するってことになるでしょう。私は仲間に見放されますよ。帝国では、人望なんてゼロどころかマイナスですし」

「そつでもありますまい」

オーベルシュタインが無感動に割り込んだ。

「卿の部下は、卿が即位すれば喜んで臣下となり、卿に忠誠を尽くすでしょう。すでに一度、彼らは同盟政府より卿一人の命を選んで

いる。彼らにあるのは、卿への忠誠であって民主共和主義への忠誠ではない」

ヤンのハイネセン脱出劇のことを指摘しているのだ。

帝国に敗北した自由惑星同盟が、敗戦国としてかろうじて存続を許されていた当時。ヤンは退役軍人として市民生活を送っていた。そんなヤンを危険視する帝国軍の一部が暴走し、謀殺しようとした。あろうことか同盟政府はそれを黙認、国家存亡の危機を幾度も救ってきたヤンを用済みとして厄介払いするところだった。

どこまでが真実でどこからが被害妄想かは不明だが、ヤンが生命の危機にさらされたのは間違まちうことなき事実である。

そして、それを是ぜとしない者達がいた。元ヤンの部下達。通称ヤン・ファミリーの面々だ。彼らはヤン救出のために市街戦を繰り広げた拳句、同盟首都惑星ハイネセンを脱出して独立組織を立ち上げた。それは自由惑星同盟滅亡後も民主共和制の最後の砦として存続し、エル・ファシル共和自治政府へとつながっていく。

オーベルシュタインの断定を覆くつがえそうとして、ヤンは言葉を見つけれなかった。それは彼が苦悩し続けてきた矛盾そのものだったからだ。

民主共和制とは、突出した個人ではなく不特定多数の意思を尊重する制度だ。一人の英雄に頼り切った社会が、その名に値するものだろうか。

「ではお尋ねします。オーベルシュタイン元帥。貴官は、私が皇帝になることに賛成できますか」

「皇帝の意思であれば、従うのみ」

本心ではあるまいに、とは、帝国軍の双壁と謳うたわれた二人、ミッターマイヤー元帥とロイエンター元帥の間で交わされた無言の会話である。

「ヤン元帥、余は卿を選んだ。誰にも口出しは許さぬ。卿にもだ。

もしどうしても断るとあらば、エル・ファシルを抹消し、後顧の憂いを絶つまでのこと。卿を野放しにしたまま共和自治領を存続させるほど、余は寛容さに恵まれておらぬ」

とどめ、だった。それでもヤンは悪足掻きを止めようとしな

「では、私が帝政を廃し、人類社会を民主共和制に移行してしまっても良いとおっしゃるんですね」

それはとんでもなく危険な意思表示だった。だが、ヤンもヤンなら、受けて立つ皇帝も皇帝である。

「構わぬ。王朝などというものは、無理に存続させる必要などあるものか。それに代わる秩序を構築する方がよほど困難だが、卿ならば、無秩序と混乱を残すような無責任なまねはすまい」

それは生涯をかけたライバルに対する、奇妙なまでの信頼。

そしてヤン・ウエンリーは、その信頼を裏切れない自分を知っていた。

第四話 困惑 その一

双壁が沈黙を破ったのは、皇帝の御前しぜんを退出した後だった。

皇帝の病床のある寢室周辺は、ほとんど人影が無い。遠巻きに厳重な警備が敷かれていたが、その中央部は敢えて無人地帯にされている。不審者が紛れ込む可能性は限りなくゼロに近い。誰にも聞かれない話をするのに、絶好の場所でもある。

「あれほどの抵抗を示すとは、意外だな」

「いや、ヤン・ウエンリーらしいと言うべきだろう。民主共和主義に拘り、権力の掌握を拒否してきた男だからな」

互いに親友同士、戦場では命を救い救われてきた間柄だ。遠慮なく本音をぶつけあえる。そこに駆け引きや牽制など割り込む余地は無い。

「で、どう思う。あの男は、俺達の主君たりえると思うか」

ミッターマイヤーが躊躇いがちに言った。皇帝ラインハルトの死を前提とした問いなど、したくもないがそうもいかぬ。

「奴の能力から言えば、最善の選択だろう。しかし、奴の経歴に対する反発は当然あるだろうし、何より本人が嫌がっているのではな俺なら二つ返事で承知するところだが」

ミッターマイヤーの顔に、懸念が広がった。公になれば、謀反の証拠として取り沙汰されかねない発言である。

「おい、そういうことは口にするなよ。難しい時期だ。オーベルシユタインあたりを喜ばせることもあるまい」

「心得ているさ。そう心配症では禿げるぞ 奥方に嫌われたくなければ、もっと気楽にやることだな」

「エバアは俺が禿げても愛してくれるさ。それよりもだな、」

さりげなく惚気おぼけておいて「しかも無自覚」、先を続ける。

「アレク大公が即位なされば、波風は立たないだろうに。我が皇帝も思い切ったことをなさる」

「確かにその場は治まるだろうが、問題はそれが長続きするかどうかだ。帝国が弱体化するのは避けられまい。そうなれば、あのペテン師エンリクが同盟の再建をやったのけるだろうよ。奴を初めからローエングラム王朝に取り込んでおいた方が利口というものだ」

「しかし、それでは、帝国が同盟に乗っ取られることになるのではないか」

複雑な思いに駆られながら、二人は機敏きびんに足を運び続けた。

「確かに、ヤン・ウエンリーを帝国に取り込むことは有効な手段ですわ。でも、皇帝として擁立するととなると、リスクが大きくなります」

皇帝妃カイザリンヒルデガルド・フォン・ローエングラムは、ベッドの脇に座って夫に話しかけていた。

「では、皇帝妃カイザリン、貴女あなたが女帝として即位するとでも。余は、婚姻によって権力が継承される前例を残したくないのだ。政略結婚など、当事者の意思を無視する行為だ。自由意思を奪われて囚われの身になる女性は、姉上を最後にしたい」

グリューネワルト大公妃の名を出されて、ヒルデガルド、通称ヒルダは、夫の意思が堅いかたことを悟った。

突き詰めれば、姉のためにゴールデンバウム王朝を打倒したライオンハルトである。非公式ではあるものの、彼女は、確かに先帝フリードリヒ四世の妻だった。愛妾として後宮におさめられ、籠の鳥となったのだ。

「だからと言って、余は、皇帝妃の力量を認めていないわけではない。むしろ、アレクサンデルを皇帝とした上で貴女が摂政として立つことも考えた。本当だぞ」

やや言い訳めいた物言いに、微笑ましさを覚える。私人としての

ラインハルトは、まだまだ成長途上の少年のようだ。

そんな素^すの顔を見ることが出来る、数少ない人間の一人になれたことを、ヒルダは嬉しく思うのだった。

第五話 困惑 その二

どんよりと、落ち込むだけ落ち込んだヤン・ウエンリーの帰還に、ベルンカステル・ホテルで留守を守っていた一同は顔を見合わせた。ユリアン・ミンツから事の次第を説明されると、蜂の巣をつついたような騒ぎになった。大喜びで浮かれた者、怒りを頭ににする者、あきれ果てる者、それぞれ若干名。残りの大多数は困惑を隠し切れずにいた。

ヤン・ウエンリーを第二代皇帝に指名するとの勅令が発せられたのは、その翌日のことである。そして、ホテルで見られた反応が人類の版図全域で拡大再生産されることとなった。

「いっそ、夜逃げしたいよ」

ヤンがホテルの一室で漏らしたボヤキは、限りなく本音だった。

「逃げると言ってもどちらへですかね」

にやにやと聞き返す美丈夫に、ヤンは無然と言ったものだ。

「喜んでいられるだろう、シェーンコップ」

「おや、分かりますか」

「だいたい君は、私に皇帝なんて務まると思っていいのか。どうせ、居ても居なくても同じ飾り人形にされるのがオチだね。そんなものになるのは御免ごうむる」

「居ても居なくても同じですか。確かに、平時の貴方はそうでしょうな。一見すれば、ね。しかし、実際は甚だしく違う」

シェーンコップの言い様に、ヤンは眉をひそめた。

「閣下のカリスマ性は、実に大したものですよ。なにしろ、国家の後ろ盾を無くしても反帝国組織の忠誠を一身に……」

「止してくれ、聞きたくない」

ヤンらしくもなく、乱暴に話の腰を折る。

「……言論の自由も、認めては下さらないわけですか。かなり苛立つておられますな」

不機嫌に黙り込んだまま、ヤンは無遠慮な部下の前を通り抜け、部屋を出た。パタンとドアが乱暴に閉められる。

「凶星だったようですな。相変わらず大人げない」

年長者の余裕を見せて、シェーンコップがひとりごちた。

温厚な紳士だと一般にイメージされているヤンだが、その実、好き嫌いが激しく、時に子供っぽい反応を示す。そんな素顔を見せてもらえることに、シェーンコップは密やかな満足を感じていた。ヤン・ウエンリーという人間を知られば知るほど、ますます好奇心を刺激される。決して退屈することがない。

権力者になったヤンを見てみたいという長年の希望が叶えられようとしている今、何を思い煩うことがあるだろう。それがヤンの意思に反しようかどうか、強引に背中を突き飛ばすだけのことだ。

「覚悟を決めていただきましょうか、閣下」

そう言って、ヤンの出て行ったドアに視線を投げた。

シェーンコップを一人残して移った続き部屋には、先客がいた。

ホワン・ルイ主席をはじめとする、エル・ファシル共和自治政府の高官達である。

「ヤン元帥、その、今度のことだが」

歯切れ悪く一人が切り出したが、後に続くのは困惑と戸惑いの言葉ばかりだった。実際、彼らにしてみれば喜んで良いのか、それとも悲しむべきか、判断に困るのだろう。

そもそも今回の訪問は、皇子誕生祝いの使節団だった。たったそれだけのために政府主席までやって来たのは、帝国とエル・ファシルとの力関係ゆえである。新銀河帝国とたかだか有人惑星一つでは、

はなっから勝負になるはずがない。

つまりは帝国への御機嫌伺い、ついでに戦後復興の支援の一つでも取り付けられれば御の字だった。そのためなら、ほとんど唯一の切り札であるヤン・ウエンリーを皇帝の鼻先でチラつかせるぐらい易いもの、だっただははずなのだが。

このままヤン・ウエンリーが皇帝として即位すれば、エル・ファシルはこの上なく強力な後ろ盾を得ることができる。その代わり、民主共和制の精神的支柱を失うことになりかねない。かと言ってヤンを強引に連れ帰ったりすれば、それこそエル・ファシル排斥の口実を与えることになる。

堂々巡りに似た議論は、ヤンを帝国に差し出すという結論以外に辿りつき様がなかった。

「引き受けてもらえるかね」

ホワン・ルイに真正面から質問されて、ヤンは逃げ道を失ってしまった。一流とまではいかないが、誠実さと狡猾さを併せ持つ政治家に、ヤンは苦手意識を抱いている。

「どうやら、他に選択の余地は無さそうですね」

「言いながらも溜息を抑えられない。

「君にはすまないと思っっている」

「いえ、貴方に謝っていたら問題ではありませんから」

そう言って、目を伏せた。

ホワン・ルイは、そんなヤンを凝視した。一見大人しい青年に過ぎない彼が、この場で一番年若いことに思い至る。まだ、たったの三十四歳でしかないのだ。

軍人としてさえ華奢なその肩に、人類の命運を担うというのか。

いや、これまでも担って来たのだったな。つい、外見に騙されて忘れてしまう。

微笑を浮かべた政府主席に、幾人かが訝しげな目を向けていた。

第五話 困惑 その二（後書き）

昨日、ユニークアクセスが千を超えました。

ありがとうございます。

ネットって凄いなと改めて思います。

同人誌で皇帝ヤンのお話を千冊売り上げるのに、ぶっちゃんけ十年以上かかりました。

それがネットだと十日足らずで読んでいただけなのです。あー、本当に凄い（笑）

第六話 即位式への道（前書き）

えー、すいません。話が重複しております。

もともと短編連作だった皇帝ヤンのお話を長編に編集しなおしている関係上、どちらか片方だけ残して重複した部分を削除すると、どーにもまとまりのない文章になってまして（^^^^

まあ、素人の文章ということでお許しください。

第六話 即位式への道

新帝国歴三年。ローエンングラム王朝始祖、皇帝ラインハルト・フオン・ローエンングラムが病により崩御した。即位して足掛け三年、一年をわずかに超えた治世であった。

そのあまりに若い死は人類全体にとつての損失であったが、ヤン・ウエンリーにとつては、とんでもない災厄の始まりだった。

皇帝ラインハルトは、その死の直前に、ヤンを次期皇帝に指名した。本人には、拒否するならエル・ファシルに認めた自治と民主共和制存続の権利を剥奪する、と脅迫して。

「それで足りなければ、帝国軍による侵攻も辞さぬ。余は、やると言ったら必ずやる」

そう言明した上で、全宇宙にヤンの第二代皇帝指名を喧伝してしまつたのだ。

当然、様々な反響がわきおこつたが、賛成するにしろ反対するにしろ、ヤンの即位は既定事実として受け止められてしまった。

反発はあつたが、奇妙な納得が、それを圧あつしていた。

今までの経緯けいゐを考えれば、「ヤンが皇帝の衰弱に付け込んで勅命を引き出した」という見方が成立する。にもかかわらず、その声は大きくならずじまいだった。

ヤンが皇帝ラインハルトと対等の立場を守り抜いてきたことは周知の事実であつたし、皇帝ラインハルトが自身の意思を曲げて勅命を出すなど有り得ないと、誰もが承知していたからだ。

帝国においては、勅命は絶対であり、どれほど意いに反しようとも、従うべきものだった。

ノイエラントにおいては、皇帝ラインハルトの支配を受け入れた以上、ヤン・ウエンリーが自分達の元へ戻ってくることに何の抵抗

があるだろう。

エル・ファシルにおいては、ヤンの人望が問題を解決した。まったく、オーベルシュタイン元帥の指摘の通りだったのである。

かくして、人類社会は皇帝ヤン・ウエンリーを受け入れた。

今は無き自由惑星同盟の独裁者の椅子を蹴飛ばし続けて来たヤンにとつて、全人類を統^すべる玉座など、二重の意味で耐えがたいものだった。時間さえあれば、効果的な反撃をしていたに違いない。代わりの候補者を立てるなり、ラインハルトに諦めさせるなりの陰謀^{いんぼう}術策^{じゆつさく}を駆使^{くし}してのけただろう。

残念ながら、ヤンは戦場以外では臨機応変^{りんきおうへん}という言葉と疎遠^{そえん}だった。あまりの事態に呆然^{ぼうぜん}としている間に、肝心の皇帝が亡くなってしまったのだ。

後はもう、逃げ道を探す余裕などなかった。社会の混乱^{こんらん}回避^{かいひ}という責任を負わされ、とりあえず即位するしかなかった。いたのである。

「なあ、本当にこれ全部、着なきや駄目かい」

いかにも嫌そうなヤンの言葉に、ユリアンは宿^{なだ}めるような調子で言った。

「今日だけですから。即位式なんてすぐに済みますから、我慢してください」

「重そうだなあ。どうせ似合わないのに、気が進まないよ。だいたい、衣装で権威を強調しようなんて、古代国家から進歩してないじゃないか。それも多ければ多いほど良いなんて、単純すぎて涙が出そうだよ」

「きつと、人間の本能に根ざしてるんですよ。だから効果があるんです。さあ、覚悟を決めて下さい。嫌なことは、さっさと済ませてしまった方が良いでしょう」

いかにも情けない溜息をついて、ヤン・ウエンリーは最初の衣装を手に取った。余人であれば嬉々として身にまとうであろうそれは、銀河帝国皇帝の礼典用正装だった。

「……………今日だけで良かったですね」

ユリアンの言葉の意味を正確に受け取って、ヤンは盛大に溜息をついた。もう、これしか反応の仕様が無い。

壁一面を占領している姿見の中で、『逆立ちしても礼服の似合わない男』が、肩を落としていた。

第七話 即位式は踊る 1

先帝ラインハルトの国葬が終了し、慌ただしく次期皇帝の即位式の準備が進められた。社会の不安定化を嫌い、なるべく早く既成事実を作ってしまうおうという帝国首脳部の思惑が働いた結果である。主だった弔問客は、そのままフェザーンを離れることなく、そのまま祝賀の席につくことになった。

ローエングラム王朝の本拠地たる皇宮『リーベンブリュン獅子の泉』は、まだ設計段階で建設予定地さえ確定していなかった。かといって仮皇宮では手狭すぎる。

急遽用意された会場は、コンサートやスポーツ大会に供まされる機会の多いフェザーン中央スタジアムだった。いかに飾り立てようと、間に合わせとの感を否いなめない。

しかし、その方がヤンにとって幸さいわいだったろう。これが新無憂宮ノイエサンヌーシの壮麗な黒真珠の間だったりしたら、それこそ場違い過ぎて道化にしか見えないだろうから。

左右に分かれて威儀いぎを正ただす文官と武官の間に残された空間を、ヤンは仮設の玉座に向かって歩いていった。さすがに緊張していたが、それ以上に馬鹿馬鹿しさが先に立って、悲壮感など露わほども湧わいてこない。それより、嵩張かさばる衣装が歩きにくくて仕方なかった。

教えられた手順通り、玉座の上に置かれた王冠を手にとると、あっさり頭上に戴のせた。なんだか、芝居でもしている気分だ。そして後に振り返る。途端に、一万あまりの顔が視界へ飛び込んできた。

シン、と、静寂がその場を支配した。

間を置かず、気まずさがそれに取って代わった。タイミングを外

してしまい、挙げるに挙げられない歓呼を誰もが持て余している
見て取れる。

「おやおや、こいつは気の毒だな。」

助け船を出すつもりで、ヤンは口を開いた。襟元に付けられたマ
イクが、会場の隅々までその声を届ける。

「私がヤン・ウェンリーです。どうぞ宜しく。静聴、感謝します」

そして、ペこりと頭を下げる。落ちないように王冠を片手で押え
ながら、威厳も何もあつたものではない。おまけに次の瞬間には、
スタスタと来た道を戻りだしたのだ。

これには全員が驚いた。

当然あるべき皇帝の演説はどうなるのだ。それに、皇帝の権威を
示すための勅命は。

戸惑いのざわめきが可聴水準に達する前に、玉座近くから皇帝の
背に向けて声が飛んだ。

「お待ち下さい、陛下」

ヤンの足が止まった。慌てるでもなく身を返し、声の主を認める。

「何か、オーベルシュタイン元帥」

「御引き留めいたしましたして申し訳ございません。が、ただ今、エル・
ファシルより報告が参っております」

言い置いて、傍らから小声で報告する小者に顔を向けた。電子機
器より生身の人間を多用するのは、ゴールデンバウム王朝からの未
だに残る伝統である。

その間に会場係が駆け付け、オーベルシュタインにマイクを渡し
た。

小さく頷き、通路に一步踏み出す。全員が目が、軍務尚書に集中
した。

「報告いたします。エル・ファシル中央病院にて、皇帝妃が男子を

御出産なさいました。母子ともに健康、とのことです」

第八話 即位式は踊る 2

「報告いたします。エル・ファシル中央病院にて、皇帝妃が男子を御出産なさいました。母子ともに健康、とのことです」

オーベルシュタインの無感動な声が、会場いっぱいに響き渡った。一拍置いて、場内は驚きと興奮に包まれた。そこかしこでざわめきが沸き起こる。

「なんと、ヤン・ウエンリー、いや、皇帝陛下には、奥様がおられたのか」

「御懐妊なさっていたとは初耳。いったいどんな方なのだ」

「皇子御出産とは目出度いではないか」

「しかし、皇位継承順位はどうなる。アレク大公は………」

「しっ、めつたなことは口にするな」

小声のざわめきを^{あつ}圧して、オーベルシュタインの声が響いた。

「おめでとございます。慣例に^{なら}倣い、皇子殿下に大公位の授与を宣言なさいますように」

出口近くのヤンに、改めて視線が集中した。

「ありがとう、オーベルシュタイン元帥。しかし、大公位を与えるつもりはない」

「陛下」

「私はここに宣言する。私の息子はエル・ファシル市民であり、正当な市民権を有する。息子の職業選択の自由を奪うことは、たとえ何人^{なにびと}であっても許されない。そういうことだ」

物柔らかな言い様に、エル・ファシルからの列席者はヤンが本気であることを悟った。彼等もその程度にはヤンを理解していたのだ。しかし、その他の大多数は、ヤンの意図をはかりかねていた。

「では、皇位継承はどうなさるおつもりでしょうか」

衆人環視の中、遠慮なく微妙な問題を切り込むあたり、さすがはオーベルシュタインと言うべきであろう。

「先帝ラインハルトは血統によらず即位したし、私の父は商人だった。ローエングラム王朝においては、皇帝が皇太子の指名権を持つ。私の後に皇帝になるのは、私がふさわしいと認めた人物だ。決して血統に限定されるものではない。ああ、言わなくても分かっている。皇太子が立てられる前に、皇帝が不慮の死を遂げた場合の混乱だろう」

そこで言葉を切り、スタスタと最前列へ戻ってきた。そのまま帝国軍の双璧の前に立つ。

「ミッターマイヤー元帥、ロイエンタール元帥。二人に、現在の職務と副皇帝の兼務を命ずる。期限は五年。副皇帝の任務は、皇帝が職務に耐えられなくなった場合、本人が復帰するか次の皇帝が即位するまでの期間、皇帝代行を務めることとする。皇太子が立てられていない場合は、閣議の協議により、皇太子を指名すること。ただし、副皇帝は協議に加わる資格を失う。これで心配はいらないだろう」

最後の台詞は、隣に立つオーベルシュタインに向けられたものだった。

「御意」

言いたいことは山ほどあるだろうに、口にしたのは一言のみであった。そのまま一礼して、元の自分の場所へ戻る。

「副皇帝の任、謹んでお受けいたします」

ミッターマイヤーが、困惑と緊張交じりの表情を隠し切れぬまま、短く答礼した。内容はともかく、皇帝が初めて発した勅令、いわゆる初勅である。形式上、断ることは不可能だ。

ロイエンタールは、ミッターマイヤーより余裕のある表情で応えた。面白がっているようにさえ見える。

「誠心誠意、務めさせていたただこう。御安心あれ。陛下に何があつても、帝国をゆるがせはいたしませんすまい」

強烈な自負を滲にじませた新領土総督ノイエラントは、新米の皇帝より余程よほど帝王らしく見えた。

「よろしく頼むよ。厄介事を押し付けて申し訳ない」

サラリと流して、ヤンは一同に視線を戻した。

「それから、この際、言っておく。公私の区別はきちんとつけてもらいたい。皇帝の家族はプライベートに属し、なんら公的権限を持つものではない。以上だ。解散」

言いたいだけ言つて、今度こそ本当に退場してしまう。

あれよあれよという展開に、一同は目を白黒させていた。

第九話 忘れ物（前書き）

二週間ぶりの更新です。先週末は、風邪で寝込んでおりました（
^^^

今年の風邪は夕チが悪いです。
皆様も、健康にはお気をつけて。

第九話 忘れ物

式典が（無事にとはとも言えないが、なんとか）終わると、ヤンはその足で仮皇宮柊館へ戻った。

あまりの慌ただしさの中、柊館の扱いは、まだ曖昧なままになっていた。一応、皇帝の住居ではあるが、ヤンには自分の家だとの認識がない。三日前にホテルから移って来たものの、短期滞在の客だと思っっている。

いずれ柊館とは別に、自分のための仮皇宮を用意しなければならぬだろう。しかしそれも、これから解決しなければならぬ諸問題に比べれば、ほんの些細な案件に過ぎない。

「すみません、強引に決めてしまつて」

「御気になさることはございません。陛下の御心のままに。臣民も、指導力のある皇帝を得たと喜んでおりますでしょう」

この館の元々の主、ヒルデガルド皇太后が柔らかく答えた。ヤンはすっかり恐縮して、頭を下げることにしきりである。

実際、即位式であんな演説をぶちあげるつもりは無かつたのだ。なるべく穏便に、一つずつ片付けて行くはずだったのに。特に皇帝の家族の権限については、直接皇太后の待遇にかかわる問題だ。一言本人に断っておくべきだったと思っっている。

ヤンの宣言と勅令は、超光速通信網に乗って、およそ人間の居住している全ての場所に届いていた。はつきり言って、そのほとんどがヤンの素顔を初めて見たことになる。

旧同盟領の民衆も例外ではない。なにしろマスクミ嫌いで通っていたヤンは、ずっとサングラスをトレードマークにして取材を受けていたのだ。

「それで、皇太后には、どなたを皇太子にとお考えですか」

ヤンの言葉に、ヒルデガルド、通称ヒルダは、首をかしげた。

「それは、陛下の権限でございましょう。妾わたくしの口出しするところではございません」

ヤンは盛大に溜息をついた。

「お願いします。いじめないで下さい。私は、臨時に帝位をお預かりしただけです。本来ならアレク大公が即位するはずでした。それが無理なら、すぐにでも皇太子になっていただきたいと思っています。けれど今の段階でそれを言い出せば、必ず将来に争いの種が残ります。アレク大公も私の息子も、皇帝の息子と言う点では、条件は同じなんですから」

そう、フレデリカが妊娠していなければ、ヤンは即位したその日の内にも、アレク大公に玉座を譲っていただろう。廷臣の合議制整備するなり何なんなりしてやれば、民主主義への第一歩にできたかも知れない。もともと民主主義とは、無能な王を補佐するための制度が出発点だったのだ。

「それはずるいですわ。アレクが成人して、皇帝の器ではなかったと分かっても、おいそれと退位できないでしょう。陛下のお子様だけに職業選択の自由をお与えになって、アレクにはお許し頂けないのですか」

ヤンには、返す言葉がなかった。

「おっしゃる通りです。申し訳ありません」

あつさり自身の非を認めるヤンに、ヒルダは軽い驚きを覚えていた。政治的駆け引きや政争に向いているとはとても思えない態度だ。同盟軍、いや、宇宙きつての謀将、策略家としての顔が見えてこない。

かつてラインハルトを救援するべく、旧同盟首都ハイネセンを強襲して、同盟政府に戦場のヤンへ向けて停戦命令を出させた時を思い出す。あの時、ヤン・ウェンリーが権力を得るために政府を無視

することはないと判断したのは、自分だった。

ヤンがその気になりさえすればいつでも同盟の軍事独裁者になれるのに、政治家に転身して合法的に政権を手にもすることもできたのに、全ての機会を見逃してきた理由をヤンの性格に求めたのは間違っていないかった。

それなのに、全人類の皇帝として君臨することになった皮肉を感じずにはいられない。

本当にこの人は、権力志向とは無縁な性格なのだわ。

ヤンがヒルダの元を非公式に訪ねたのは、即位式直前のことだった。

「よろしいのでしょうか。私より、皇太后陛下が女帝として即位なさる方が、ずっとふさわしく思えるのですが」

他の者が口にしたなら、畏としか思えない。そうでなくても、利己的な理由から自分を担ぎ上げようとしているとしか考えられなかっただろう。でも、判る。あれは彼の本心の言葉だと。

あの時、「皇帝ラインハルト陛下がお決めになったことです。妾に異存はございません」と答えた。

後悔はしていない。それどころか、いかに夫の決断が正しかったか、帝国中に吹聴してまわりたいほどだ。

ヤン・ウエンリーなら、必ず帝国人からも信頼を集めることができるだろう。ともすればノイエラントと帝国本土との間の相互不信が噴出しかねない状況の中で、本当に得難い人物だ。

もちろん、これで全てが上手くいくという訳ではない。それどころか、問題は山積みになっている。戦争においては比類ない才能を持つヤンに、どれだけの行政手腕があるか、はつきり言って未知数だ。

それでもヒルダは、今生きている人物の中で、ヤンほど皇帝にふ

さわしい者はいないと確信していた。そしてそう確信できるのは、幸せなことだった。

「皇太子の件は先のこととして、陛下、お子様の名前はお決まりになりましたの」

途端に、ヤンの目が見開かれた。

「しまった。すっかり忘れてた」

「^{ほか}図らずも漏れたつぶやきに、ヒルダは驚くよりも呆れてしまった。赤ん坊は「予定されていた突然の訪問者」である。名前を考えておくとまでは行かなくても、生まれたらすぐにあれこれ考えるのが普通だろうに。それを忘れていたとは。

「いえ、なんだか現実味がなくて。生まれたことを忘れてました。すみません、エル・ファシルに連絡してきます」

え？ 名前を忘れていたんじゃないやなくて、生まれたことを忘れていた？

ヒルダの目が点になった。あたふたと席を立つヤンの後ろ姿に、本当に頼りになるのかしらと、ヒルダは一抹の不安を覚えた。

第十話 初閣議 上

とにもかくにも、皇帝ヤンの治世が始まった。大方の予想に反し、ヤンは人事に手を加えるつもりが無かった。

本音を言えば、誰を後任にしたところで同じだった。

今までの部下はエル・ファシルの再建で手いっぱいだし、アレックス・キャゼル又中將を引き抜ける状態ではない。他のメンバーについては、戦争のエキスパートをそろえたところで、帝国の運営に役立つはずがない。軍人の質について言うなら、ハツキリキツパリ帝国軍の方が上だった。

だったら、現場を知っている現在の顔ぶれで行くのがベターではないか。

もちろん、ささやかな変更はあった。

エル・ファシルから取材のために飛んで来たダスティン・アッテンボローを、国营放送の長に据えた。なんだかんだ言って居残ったシェーンコップに、自身の護衛を任せている。今までの親衛隊隊長ギユンター・キスリングには少将に昇進の上、柊館に残った三人、先帝ラインハルトの妻子と姉の護衛を任せた。

そこまでの上で、ヤンは初閣議を招集した。即位式翌日のことである。

柊館に集まった面々は、多かれ少なかれ緊張していた。一人感情を面おもてに見せない軍務尚書、オーベルシュタイン元帥は別格だったが、他は皆、落ちつか無げに席に着いている。

皇太后の父である国務尚書マリーンドルフ伯爵、民政尚書カール・

ブラツケ、財務尚書オイゲン・リヒター、司法尚書オスマイヤー、それに尚書と同格とされている新領土総督ロイエンター元帥。皇帝高級副官シュトライト中将。これが閣議の正式メンバーだった。

会議室のドアが開いた。一同が立ち上がり、一斉に頭を下げた。一歩足を踏み入れて、ヤンは下手な帝国語を使った。

「ドウカ気楽ニ。席ニ着イテ欲シイ」

視線を上げた一同が見たものは、コottonのシャツにありふれたスーツ姿のヤン・ウエンリーだった。

一応ネクタイはしているが、皇宮にしてはラフ過ぎる格好だったろう。どう見ても、街中のサラリーマンにしかつていない。ヤンの後ろに従う青年の方が、ずっと威厳を漂わせている。

ヤンは中央の円卓を回って、上座に着いた。青年が椅子を引き、ヤンは小さくありがとうと言って腰を下ろした。それを見届けて、ようやく一同も着席する。その様子に、ヤンは軽く溜息をついた。

「スマナイガ……、私は同盟公用語を使わせてもらう。これは私のがままだ。分からない言葉や表現があつたら、遠慮なく聞いて欲しい。分からないまま聞き流すことはしないでくれ。帝国語の日常会話なら、何とか聞き取ることが出来るから、諸君はそれを使つてもらいたい。特殊な宮廷用語などはお手上げだけどね」

そう言うと、行儀悪く頼杖をついた。

「ついでに、私が入室しても起立は無用。堅苦しいことは苦手だね。不満だろうが、よろしく頼む」

それだけ言うと、後に立った青年に、顎に当てていた手を軽く振った。青年が頷き、ドアへと戻る。あらかじめ用意されていたワゴンを押して、各自の前にコーヒーカップを給仕して回った。

ドアの近くから、である。

当然、ヤンは後回しになる。

それは一種のカルチャーショックだった。旧帝国時代であれば、不敬罪で処刑されかねない事態である。それほど序列と礼儀作法が重視されていたのだ。

ヤンの前に供されたのは紅茶だった。青年はそのまま反対側の列に給仕して回り、最後にドアの外へワゴンを出して、ヤンの背後へと戻って来た。

「紹介しておこう。これはユリアン・ミンツ。私の秘書を務めてもらうことにした。私が最も信頼している部下の一人だ。ああ、まだ未成年で、成人するまでは私の被保護者になっている。ただし、」
そこで一旦言葉^{いったん}を切り、青年に目をやった。

「だからと言って、特別扱いは無用だ。皇帝の養子ということで、余計なハンデを負わせたくない。別に隠す必要はないが、吹聴してまわることは慎んでくれ」

ユリアン・ミンツは無言で礼をとった。深々と下げられた頭を起こすと、部屋の隅に下がる。一同がヤンに視線を戻せば、青年の姿は視界から外れてしまう。

「それじゃ、本題に入るとしよう。まずは、各自が抱えている最優先事項から教えて欲しい。最初は、そうだな、マリーンドルフ伯からどうぞ」

第十一話 初閣議 下（前書き）

今回は短くなりました。ちょうど切りが良い物で。

第十一話 初閣議 下

「それじゃ、本題に入るとしよう。まずは、各自が抱えている最優先事項から教えて欲しい。最初は、そうだな、マリンドルフ伯からどうぞ」

話を振られ、國務尚書は軽く息を飲んだ。

「その前に……陛下におかれましては、信厚き方を國務尚書に任命なされるが……」

ヤンが手を挙げて制した。

「すまないが、日常会話で分かりやすく言い直してくれ。私の語学力を過大評価しないで欲しいんだ。」

言われて、ためらいがちに言葉を選ぶ。礼を失しない程度に砕けた言い方というのは、型にはまった美辞麗句ひれいくより返って難しいものだ。

「陛下の御信用なさっている方を、國務尚書に任命されてはいかがでしょうか」

いささかの躊躇もなく、ヤンが問い返した。

「マリンドルフ伯は、私の下もとで働くのは嫌だろうか」

「とんでもございません。そのような事は」

「失策があつたならともかく、先帝ラインハルトが信任していた閣僚を更迭こうたいする必要など認めない。今は何より安定が先決だ。私が上司では気に入らないのも無理は無いと思うが、今は辞表を受け取る訳にはいかない。すまないが、そう、半年間だけは我慢して今の役職を務めてもらいたい。お願いする」

そう言つて、座つたままで頭を下げた。

何から何まで異例づくめの閣議に、戸惑いが幅を利かせていたのだが、そこに安堵が混じった。取り合えずは残任が承認されたのだから。

「はつきり言つて、私は素人なんだ。行政も統治もやったことがない。そもそも皇帝なんて初体験でね。それも、ふさわしい人物に帝位を譲るまでの暫定政権でしかない。出来る事は限られているし、なるべくならよりましな状態にして第三代皇帝に引き継ぎたいと思つている。せつかく戦争が終わつたのだから、少しでも平和を長続きさせたい。そのための協力をお願いしたいが、どうだろうか」

見回すヤンの視線に、民政尚書ブラツケが応えた。

「陛下の御ため、微力を尽くさせていただきます。ですが、本当によろしいのでしょうか」

「よろしいも何も……」

ヤンは苦笑するしかない。

「他にしようがないだろう。さつきも言つた通り、私は素人だ。実務については一切を諸君に頼らざるを得ない。言ってみれば、私は帝国政府の看板だな。デカデカと『皇帝』と書かれているが、それ以上のモノじゃない。ああ、質問する事は出来るな。きっと子供じみたことも聞くとと思うけど、呆れないでくれ。さて、前置きはこれくらいにして、仕事にかかろう。でないと、明日になつても終わりそうにない」

実際、一日や二日で全ての問題を検討できるものではなかった。取り敢えず急を要するものを並べ立て、ヤンが担当者を指名するという形でその日は終わった。

「事前の承認伺いは不要だ。どうせ私には言われても分からない。」

何をしたか、それは何を目的としたものか、結果はどう出たか、それだけを報告してくれ。必要があれば、各省で協議すること。取り敢えず落ち着くまで、これで行く」

下駄を預けられた格好で、閣僚たちは退席した。

第十一話 初閣議 下（後書き）

うん、ヤンらしいと思うんだ。自分を君主じゃなくて上司と表現するの。

ところで、この文章を読んでいる方、「下駄を預ける」という言い方、使うことは無くても聞いたことは有りますよね。ちゃんと意味分かりますよね。

時々、意味分かんないと若い方に突っ込まれることがあります（^^）

古臭い言い回しが無意識に出る、オバサンお富でした。

第十二話 面談 前編

「ロイエンタール元帥」

控室で待機していた側近を引き連れ、退出しようとしていた新領土総督を、呼び止める者があつた。

「何者か」

スーツ姿の年若い青年に、ベルゲングリユーン大将が問い返す。答えが返るより先に、ロイエンタールが口を開いた。

「これはヘル・ミンツ、皇帝が何か」

「はい、お手数をおかけしますが、皇帝執務室までお戻りください。皆様も一緒にとのことですよ」

不審そうなベルゲングリユーンに、ロイエンタールが説明する。

「こちらはユリアン・ミンツ。皇帝の最も信頼されている部下だぞうだ。皇帝秘書で、皇帝の御養子でもある」

部下の狼狽をたのしんでいるかの風ふうに、ユリアンは少しばかり目を見張つた。どうやら癖のある性格らしいが、陰湿さは感じられない。変に隠したり大袈裟にしたりせず、サラリとヤンとの関係を説明する口調が自然だった。

先帝ラインハルトが使用していた執務室をしばらく拝借しているという風情ふうせいで、ヤンは戻つて来たロイエンタールを出迎えた。

「こんなに大きなデスクは、どうにも落ち着かないものだね」

言いながら、脇のソファに席を移す。自分達まで席を勧められて恐縮する部下達を尻目しりめに、ロイエンタールは堂々とヤンの正面に座

った。

「何のご用でしょうか、皇帝」

「率直に言わせてもらおう。貴官には、皇帝になる野心は有るだろうか」

いきなりの質問に気色ばんだのは、問うた本人でも問われた当人でもなく、周囲の方だった。

「有る、と答えたら、どうなさるおつもりですか」

「安心する」

ヤンの返答に、緊張よりも戸惑いが沸き立った。一人、ロイエンタールだけは興味深そうに質問を重ねた。

「叛逆の咎とがで肅清はなさらないのですか」

「いや。今の状態で帝国軍の双壁の一人をどうにかしようなんて、無理な話だ。たちまち帝国軍全軍が叛逆に走るだけだろう。どうせ帝位を譲るにしても、もっと穏やかな方法をとりたい。戦闘沙汰を起こせば、傍迷惑はためいわくなだけだ」

「即位したばかりで、帝位を譲ると口になされるか」

「だからだよ。今なら誰が皇帝になっても、実力さえあれば社会から承認されるだろう。だったら、最も実力のある人物が立つべきだ。私では早晚そつぱん破綻するだけだしね。ロイエンタール元帥ならば、軍事のみならず統治にも確かな手腕を持っていると新領土で実証済みだし、これ以上の人選は無いと思う」

「どうやら、陛下には、退位なさりたがっているようにお見受けいたしますが」

「うん、退位したい」

ロイエンタールはかなり際きわどい発言をしているのだが、常識外れのヤンの言動の前では、当たり前障りのないものとか感じられなかった。口をはさむことも出来ず、ただただ話の成り行きを見守るしか

なかった一同の耳に、ロイエンタールの失笑が届いた。

「御断りですな。皇帝ラインハルトに指名されたのならともかく、皇帝ヤン、陛下に代ってこの困難な時期にわざわざ苦勞を買って出る気は有りません」

自分が忠誠を誓ったのは皇帝ラインハルトに対してであり、ヤン・ウエンリーに対してでは無い。これ程あからさまな表現に気づけぬ者は居ないだろう。しかし、ヤンの反応には激昂げきごうの欠片かけらもなかった。「やっぱり駄目か」

そう言って、溜息に似た息を吐いた。

第十三話 面談 中編

「まあ、この段階で交代するとなると、新領土が何かと騒がしくなるだろうし、無用の血も流れるだろう。しばらくは私がやるしかないんだが……。将来的にはどうだろう。考えておいてもらいたいんだが」

ロイエンタールが目を細めた。

「それは本心でいらっしやる？」

「もちろん。ここだけの話になってことも言わないよ。証人もいることだし、なんなら文章にしておこうか」

今にも執務机に戻ってペンを手に取りかねないヤンに、さして慌てもせず、ロイエンタールが押し止めた。

「その必要はありません。帝位が欲しいとなれば、紙切れの一枚や二枚無くても、この手に握って御覧にいれましょう」

自信にあふれたロイエンタールをしげしげと見やって、ヤンはポロリとこぼした。

「やっぱり似ているな」

一同が怪訝な顔になる。

「似ているとは？」

「うん、前から思っていたんだが、つくづく確信した。ロイエンタール元帥、貴官はシエーンコップ中將に似ているところがある。特に、不遜なまでの強烈な矜持だ。本当にそっくりだよ。違いは、そうだな。シエーンコップには、権力を握って頂点に立つことは出来ないという自覚が有るところだろうな。しかし、貴官は頂点に立つだけの器量と自信を持っている。そうだろう」

「……………御褒めいただき、恐縮すべきでしょうか」
「別に褒めたつもりはない。私にとっての真実を言ってみただけだ。事實は一つしかないが、解釈は幾通りもあるものだしね。とにかく、貴官が皇帝になる決心をつけたなら、直接私に言ってもらえないだろうか。なるべく平和裏に事を運びたい。間違っても、武力に訴えようなんてしないでくれ。せつかくの平穏な年金生活をフイにされたら、私情に走って何をしでかすか、自分でも分からないから」

内容とは裏腹に、真摯な言葉だった。

その目に何を見たのだろう。ロイエンタールはゆっくりと頷いた。
「御約束しましょう。陛下に無断で、叛旗を翻ひるがえすことはいたしません」

「うん。叛逆するなら、必ず予告してからするように」

冗談としか取れない約束を、二人は真面目に交わしたのだった。

はらはらしながら見守っていたベルゲングリューンが、彼の主から言葉を受けたのは、その夜、早々にハイネセンへ戻る途中だった。
「面白い人物だな、ヤン・ウェンリーは」

「閣下」

いくらロイエンタール艦隊の旗艦、トリスタンの艦橋であるとはいえ、人目がある。おおっぴらにする話題ではないし、そもそも皇帝を呼び捨てになどして欲しくはない。

「構わぬ。皇帝の耳に届いたところで、苦笑するだけだろう。あれだけ玉座に似つかわしくない人物も稀まれだが、どこまでやれるか、興味がわいた。当分、見守ってやるさ」

そう言ってクツクツと笑う。

「大人物か、それとも規格外れというだけか。どちらにしろ、敵には回したくないな」

帝位に野心が無いと言えば嘘になる。しかしそれより、ヤン・ウエンリーという人物への好奇心が勝^{まさ}っていた。同時代の軍人として常に意識してきたが、それ以上に一人の人間としての彼を知りたいと思うのだ。

それが、この時の彼の本心だった。

第十四話 面談 後篇（前書き）

あけましておめでとございます。今年もよろしくお願いします。

短編「ヴァルハラにて」が思いのほか好評で嬉しいです。

第十四話 面談 後篇

ロイエンター元帥が退出するのと合わせたように、陽が沈んだ。名残の朱に染まった空が、急速に明度を落として、星を浮かべだす。照明も点けず、ヤンはソファに座ったままで、ただじっとその変化を見つめていた。

「どうなさいましたか」

控えめな声は、シュトライト中将のものだった。皇帝高級副官、本来ならヤンの右腕とも言つべき役職を務めている。

「ああ、空を見ていた。自然は綺麗なものだね。すっかり忘れていたよ」

本当に何年振りだろう。しみじみと本物の黄昏を見るなんて。いや、イゼルローンの人工の黄昏さえ、気付かずに過ごしていたような気がする。

「どうかしたのかい。変な事を言つたかな」

薄暗がりの中で、相手が困つたような顔をしているのに気付き、ヤンは軽く首を傾げた。

「オーベルシュタイン元帥が参られました。御くつろぎのところ恐縮でございますが、拜謁を御許可なさいますか」

ヤンが軽く溜息を吐く。

「すまないけど、そういう畏まった言い方は苦手なんだ。オーベルシュタイン元帥が来ていますが会いますか、くらいで勘弁してもらえないかな」

「は、はあ。オーベルシュタイン元帥が来ていますが、お会いになりますか」

律儀に言い直す口調がどこか棒読みで、ヤンは微笑ましくなった。

「結構。会うよ。通してくれ。ついでに照明も頼むよ」

「畏まりました」

きつちり角度をつけた礼をして、シュトライトが下がった。すぐにオーベルシュタインを伴って戻ってくる。

「陛下、夜分恐れ入ります」

彼もまた感情の見えない棒読み調で話すのだが、なぜか微笑ましさとは無縁だった。

「ロイエンタール元帥と、穏やかならぬお話をなさったとか」

「これは驚いたね。もう君の耳に入ったのかい」

それほど驚いた様子もなく、手振りで、先程までロイエンタールが占めていた席を勧めた。

「せっかくの御言葉ではございますが、このままで御意を得ます。陛下の真意をうかがいたく存じますので」

オーベルシュタインは立ったまま、上から見下ろす姿勢で詰め寄った。

「ふう。また嫌な事を思い出させてくれるな」

「嫌な事、ですか」

「ああ。実を言うと、少々自己嫌悪になっていたんだ。自分の計算高さが嫌になる」

軽くノックの音がした。失礼しますと入って来たのは、ユリアン・ミンツ。紅茶とコーヒーを乗せたトレイを両手で運んでいた。

「元帥、中将、それにユリアンも、座ってくれないか」

ユリアンが躊躇いを見せて、高名な客に視線を泳がせた。

気付いていないのか、それとも単に無視したのか、無表情のままでオーベルシュタインが席に着いた。シュトライト中将が躊躇いが

ちに横に並ぶ。二人から離れた位置にユリアンも腰を下ろした。

「で、どんなふうに元帥は聞いているのかな」

「陛下がロイエンタール元帥に帝位の継承を打診なさった、とうかがいました」

「ふうん。それはまた、穏やかな表現だな。実際には、篡奪さんだつを教唆きょうさくしたんだが」

「陛下」

シュトライトの声に、驚きと咎とがめる調子が混じった。

第十四話 面談 後篇（後書き）

教唆^{きょうそ}。 教唆^{そそのか}すことです。

殺人教唆という言葉なら、耳にすることも有りますよね。

第十五話 面談 終編（前書き）

第十五話 面談 終編

「理由をお聞かせ願いますか」

オーベルシュタインの声には、相変わらず感情が無い。

「いいよ。ロイエンタール元帥を牽制した。教唆されたからと言って、いきなり篡奪に走るほど彼は単純馬鹿じゃない」

「牽制ならば、他にも方法が有るでしょう」

「どんな？ 地位を与えて懐柔しろとでも？」

ヤンの顔に、いたずらを思いついた少年のような表情が浮かんだ。

「尚書と同格の新領土総督より上の地位と言ったら、帝国宰相しか残っていない。それで満足してもらえるんだったら、ロイエンタール元帥を事実上の最高権力者にしてしまっても一向に構わないけどね。彼は誇り高い。たとえ形だけとはいえ、皇帝と言う上位者がいる事に耐えられなくなるだろう。だったら、初めからロイエンタール元帥に皇帝になってもらった方がすっきりするし、面倒が無くて良い」

「ならば、形だけなどとおっしゃられず、名実ともに上位者としてお立ちになれば問題ありますまい」

淡々としたオーベルシュタインの切り返しに、ヤンは上機嫌を引つ込めた。

「それは無理だろう。なにしろ比較対象が皇帝ラインハルトなんだ。先帝以上の存在でなければ、ロイエンタール元帥は金輪際、我が皇帝とは呼ばないよ。私では逆立ちしたって成れっこない」

ヤンは別に卑下しているわけではない。皇帝ラインハルトは不世出の天才であり、歴史に屹立する巨人であり、多少軍事能力があるだけの凡人でしかない自分が超えられる存在ではないと思っていた。その自己評価を周囲に漏らせば異論百出になるだろうと、想像は

できるが理解はできない。というか、理解したく無かったりする。

「実際問題として、ロイエンタール元帥の方が私よりずっと皇帝に相応しい。そう思わないかい」

そう言いながら、ヤンは素直に賛同してもらえそうな相手へ顔を向けた。

「ですが提督……、皇帝、ロイエンタール元帥がお辞めになったら、新領土提督の後任をどうなさいますか。旧同盟の人物では、帝国内に旧同盟復活の懸念が広がるでしょうし、帝国の人物では、その……」

言って良いものかどうか、ユリアンが口ごもる。

「その通り。今は内戦をしている余裕は無い。誰を責任者にしても、必ず不満の声が上がるだろう。ロイエンタール元帥でも新領土側は不満だろうが、叛乱を起こすほどじゃ無い。まあそれもあって、しばらくでいいから彼の気を逸そらしたかったのさ。総督職に専念してもらえるようにね」

「じゃあ、何故、わざわざ帝位を匂わせたりしたんです。牽制するだけなら分かりますけど、気を逸らせるんなら、逆効果じゃないかと思っんですけど」

疑問を躊躇い無くヤンにぶつける青年を、オーベルシュタインは注意深く眺めていた。

皇帝の養子と言うあやふやな立場の青年は、どうやら肉親同然の親密さを得ているらしい。警戒を怠ることは出来ない相手のようだ。

「何度も言うようだが、彼は誇り高い男だ。権力欲に目の眩くらんだ俗物じゃあない。私は要らないからあげるよって、そんなふう言われたら、かえって欲しくなくなるだろう。それと、私が彼を高く評

働していることを内外に示す狙いもある。副皇帝に任命したのもその表れあらわと思ってもらいたい。ま、あれは実権の無い名譽職だし、私がかどうにかならなければ、何の役にも立たないけどね。宣伝くらいにはなるだろう」

言って、紅茶に手をつけた。

「他に質問は」

誰にともなく尋ね、無ければ明日にしてくれないかと頼んだ。

「とにかく疲れた。何か食べて、もう寝るよ。こんな調子じゃ、過労死してしまいそうだ」

こうして、即位二日目が終わった。

第十五話 面談 終編（後書き）

ようやく即位二日目です。先は長い……………。

第十六話 法律って面倒ですよね ? (前書き)

お待たせしました。久々の更新です。

第十六話 法律って面倒ですよね？

先ごろ完成した皇宮『獅子の泉』の中心に、皇帝執務室は位置している。国家の威信をかけた壮麗な建造物……では全くない。皇帝の住まいとしてはずいぶんこじんまりとした建物だった。

皇帝の強い要望で華美を省いたからだが、わずか半年で建てたためでもある。将来的には周囲に各省庁の棟を並べ、回廊で結ぶ予定で、敷地だけはたっぷり用意されていた。順次着工して、完成までには十年以上かかるだろう。

効率だけを求めるならもっと早く建設出来るのだが、セキュリティ上の問題や、「建物が出来たところで、どうせ忙しくて引越なんぞしてられるかつ。そんな余裕があったらもっと緊急性の高い復興事業に振り分けとけ」という、身も蓋も無い事情があったりする。

長年の戦争で、旧帝国、旧同盟、どちらの社会も疲弊が激しく、本格的に立て直そうとすると、いっせゼロから作った方が早いんじゃないかという仕事量になってしまうのだ。

しかも、元通りに修復してお終いというわけには行かない。新銀河帝国として新しい国家体制を構築しなければならぬのだから、その混乱ぶりたるや、推して知るべしである。

皇帝執務室のドアを、シュトライト中将がノックした。手には、皇帝の決済を必要とする書類の束があった。

民間や一般省庁ではオンラインでの電子決済が主流だが、皇帝の元まで届くような公式案件は、古風な紙製の書類が使われている。筆跡が明確に残る手書きの文章の方が、電子データより改竄されにくく、かつ希少性から権威を示せるという理由からだ。

「失礼いたします」

いつまで待っても返事が無いので、声だけ掛けてドアを開けた。そのままスタスタと入室し、書類をデスクの上に置く。ヤンはと言うと、まるで気付かず寝息を立てていた。

もう、呆れたり怒ったりしない。いちいち反応していたら、身が持たないのだ。必要な時だけ目を覚ましてもらえれば良いと割り切っている。

思えば即位当初から、過労死するだの昼寝する暇も無いだの、それらしいことを口にしてはいた。しかし、冗談だと思えなかった。朝から深夜まで大勢の人と会い、指示を出し、それなりに勤勉だったのだ、この方も。

初めて昼寝している皇帝ヤンに遭遇した時、シュトライトは、てつきりヤンが「倒れた」と思い、慌てて医者を呼ぼうとした。それを押し止めたのは、皇帝親衛隊長になったシェーンコップ中將だった。貴族的で端正な顔にシニカルな笑みを浮かべて、流暢な帝国語でのたまったものだ。

「これまでが非常事態だったのですな。なに、仕事を押し付ける相手がそろって、いつものヤン・ウェンリーに戻っただけでしょうな」などと、主を馬鹿にしているとしか思えない台詞だった。

さらに驚いたことには、ヤン・ウェンリーを尊敬しているはずのクリアン・ミンツまでもがシェーンコップに同調して、これで一心ですぬとか、皇帝が寝ておられる間は平穩無事で良いことですか言い出した。

当時はどう反応していいものかすら分からなかったシュトライトだが、今となってはちよつと微妙な思い出だ。

「起きていただけませんか、皇帝」

「んー。なんだい」

熟睡していた訳ではないらしく、今日はすぐに返事があった。それでも、デスクの上に投げ出された足は動かない。

「サインをお願いいたします」

ようやく足が下ろされ、ぼさぼさの髪を掻きまわしながら、ヤンは肘をついた。

「どうしてこう、書類戦争というのは切りが無いんだろう」

ぶつぶつ良いながら、それでも一応目だけは通す。帝国の公式文章の書式にも、いいかげん慣れてきた。

大抵はそのまま署名して終わりだが、この日は珍しく、手が止まった。

お知らせ

この度の大地震で被災された方、心よりお見舞い申し上げます。
先日、身内を亡くしたばかりですので、家族を失う寂しさ、悲しさ、
辛さは身にしみます。

無理はせず、ゆっくりで構いませんから、前を向けますように。

更新滞り中につき、お詫び申し上げます。

三月の春コミにて、委託参加予定でしたが、イベント中止となりました。

このため、「皇帝ヤンのお話」の販売は、八月の大阪のSCCまで
お預けとなります。

自サイトによる通販は随時受け付けております。

在庫は、あと……………十七冊です。

取り急ぎお知らせまで。

第十七話 法律って面倒ですよね ? (前書き)

おまたせしました。短いですが、これから一騒動もちあがります。

第十七話 法律って面倒ですよね？

「シュトライト中将、これは何だい」

パサリとデスクの上に投げ出された一枚の書類が、シュトライトの意識をひいた。

ずらりと並んだ氏名、その後ろに書き込まれているのは罪状、所轄裁判所、執行予定日。

「死刑執行許可願の一覧表にございます。そもそも司法権は皇帝陛下の占有権限、各裁判所に代表される司法機関は、あくまで皇帝の代理として機能しております。ゆえに、陛下の御意志一つでいかようにも変更、取り消しが可能でございます。しかしながら、処刑に限っては可逆性が皆無。いかに陛下の御意志と言えども、死者を蘇生することあたわず。万が一にもそのような事態になることを避けるため、死刑に限り、執行前に陛下の御裁可を仰ぐこととなっております。個別の書式ではなく一覧表となっておりますのは、陛下のご負担を軽減するためにございます」

帝国人にとって常識レベルの知識から丁寧に説明するのは、ヤン対応マニュアルとでも言うべき、シュトライトのスキルである。何度も聞き返されるより初めから説明してしまう方が、時間の節約になるし、お互い余計なストレスを感じなくて済むというものだ。

「なるほどね。ま、理解はしたよ。納得は出来ないけど。ついでに、もうちょっと砕けた言い方になってもらえると嬉しいんだが」

「……………善処いたしたいところですが、このあたりで妥協願えれば幸いです。なんなら、正式な皇帝陛下への奏上を美辞麗句を散りばめて御披露させていただきたく、伏して御願奉りま……………」

「ああ、分かった分かった」

茶目っ気たつぷりにわざと仰々しい言い回しを始めたシュトライトに、ヤンはあっさり降伏した。すでに恒例となっているやりとりだ。

「皇帝の勅命でも、こういう伝統というやつには歯が立たないっていうのは、骨身に浸みているよ。有る意味、法律なんかより伝統の方が長い目で見ると強固なものだし」

ひとしきり蘊蓄を披露してから、ヤンは気を取り直したように、デスクの上の書類の一点を指した。

「アスツール・グロアス。不敬罪、フェザーン中央裁判所。刑の執行予定は、えーっと、明後日ね。一体、何をすれば死に値するなんてことになるんだ」

帝国には不敬罪というものが存在すると、ヤンは知識としては知っていた。確か軽犯罪の部類で、精々罰金を取られる程度だったはずだが。

手元の情報末端で刑法の条文を呼び出している間に、シュトライト中将に命じられたリュツケ中佐が、アスツール・グロアスについての裁判記録を見つけてきてくれた。その両方を見て、ヤンは唖ってしまった。

第十八話 法律って面倒ですよね ? (前書き)

更新、遅くなりました。

完結までなんとか持っていけます。長い目で見てやってくださいませ。

第十八話 法律って面倒ですよね？

不敬罪は、皇帝、皇族、各尚書、元帥号を持つ軍人「退役軍人を含む」に対し、不当な言動をとることにより成立し、違反すれば相應の刑罰に処される。

法律関係の専門用語の羅列を要約すると、たった一文にしかならなかった。ヤンの素人目にさえ、穴だらけに映るお粗末な代物だ。不当な言動には明確な基準が無く、はっきりした線引きが難しい。言い換えれば、いくらでも難癖が付けられるということだ。相應の刑罰というのも曖昧すぎて、下は単なる注意から上は死刑まで適用されるといふ無茶ぶり。全ては判事の匙加減でどうにでもなる。

アスツール・グロアスが死刑判決を受けた経緯はこうだ。

当局に悪口雑言あくぐちざつごんの音声データが添えられた密告があった。その対象がヤン・ウエンリーであったため、本格的に捜査がなされ、声紋が証拠となつて逮捕された。

本人は、ヤン・ウエンリーが皇帝に即位する以前の発言だと申し立てたが立証できず、有罪判決を受けた。上告したものの、却下されて現在に至る。

『なんでヤン・ウエンリーが即位するって話になるんだよ。あいつ、帝国の敵じゃなかったのかよ。なんで誰も反対しないんだ。さっさん俺達殺しとして、俺やあ、納得できねえ』

明らかに酔っていると分かる声が、皇帝執務室に響いた。

「これはまた。グデングデングだね。酔って記憶がないっていう主張

は信憑性があると思うよ」

自分への罵詈雑言をその一言で流したヤンに、リュッケ中佐はこっさり突っ込みを入れた。反応するのはそこですかと。

「シウトライト中将、司法尚書に連絡してくれ。上告を認める。裁判のやり直しを命じるから、必要な手続きを執るように。大至急頼むよ。刑の執行まで時間が無いだろう」

「はあ、それは構いませんが、失礼ながら、この内容では有罪が覆ることは無いと思われませう。陛下が無罪を望まれるならば、恩赦をお与えになった方が確実かと愚考いたします」

たとえ本人に記憶が有ろうと無かろうと、ヤン・ウェンリーに対して悪口雑言を吐いたのは間違いないのだ。不敬罪を免れる事は出来ない。

「それじゃあ、意味がない。正式な裁判で無罪を確定させないと、こんな馬鹿馬鹿しい判例がまかり通ることになる。私の悪口を言うただけで死刑なんて、こんな判決、二度も三度も煩わされたくないよ」

「無罪、ですか」

いくらなんでもそれは無理なのではと、帝国人二人は思った。

唯一可能性が有るとすれば、本人の申し立て通り発言がヤンの即位以前だったと立証することだけだろう。アスツール・グロアス一人ならそれで済むが、無罪を判例として確定することは出来ない。皇帝ヤンが即位した今となっては、有罪と判断されるからだ。

ヤンとユリアンは、そんな帝国の常識をあつさり無視した。

「では、優秀な弁護士を用意しなくちゃですね。どなたか心当たりはありますか」

「うーん、キャゼル又先輩に問い合わせしてみようか。人権問題に強い人を見つくるってもらおう。行政訴訟を専門にやってる法律事務

所あたりが狙い目かな」

シュトライト中将与リュック中佐は、馴染みの無い同盟語に？マークを飛ばした。ジンケンモンドイとかギョウセイソシヨウというのは、具体的にどのようなものかとおっさに把握出来ない。

「なに、なんとかなるよ。要はこの人物の発言が正当なものだって立証すれば良いんだから。それで不敬罪は不成立。簡単だろ」

「お、お待ちください陛下。正当な発言と仰いますが、無理が有りすぎませんか」

シュトライト中將が思わず口をはさんだ。

閑話 適任検査 上

靴は磨いた。

ポタンは大丈夫。

プレス良し、髪、セット良し。

髪、たつぷりソープを使って二回洗った。目が少々赤いのは、昨夜興奮して寝付けなかったせいだ。目薬さしたけど、こればかりはしょうがない。

何度も鏡で確認して、学生寮の仲間に点検してもらって、それでも安心できなくてソワソワしてたら、まるで初めてのデートに行くみたいだからかわれた。

うるさい、ガキのデートなんかと比べるな。こっちは緊張でナーバスになってるんだからな。

俺の名はケイン。士官学校の最上級生で、今日は適任検査の日なんだ。実質的な就職試験でもある。任官試験なんか目じゃないぞ。

士官学校を卒業しさえすれば、誰でも自動的に任官出来る。だけど、獅子の泉の最奥で働けるってのは何年に一人しか選ばれないんだ。あの憧れの薔薇の騎士連隊で適任検査を受けると通知をもらった時、俺がどんなに舞い上がったか、想像できないだろう。

宮殿のピカピカの廊下を歩く。

いかにも御上りさんす、みたいな格好は絶対に不可だ。胸を張ってる、キョロキョロするな俺。

ああ、駄目だ。足が震えてくる。ちょっとトイレに行っておこう。出頭時間までは……ああ、大丈夫、余裕はある。こら、落ち着けったら。

さっと辺りを見回して、トイレの有りそうな方を見当つけて、目立たないようにさり気無く歩きだして……。

俺は突然、格闘に突入する羽目になった。

ユリアン・ミンツは、見慣れない顔、傍目にも緊張して自分のテリトリーに侵入してきた時、全身にアラームを響き渡らせていた。危険な異分子、帝国軍の下士官用略式礼装を着用しているが板についていない。

偽装か。どこへ行くつもりだ、そっちには皇帝執務室があるのに。落ち着かない、興奮している。

刺客か。

躊躇いは一瞬だった。

警備兵を呼んでいては間に合わない。皇帝ヤンの身の安全がかかっているなら、自分のことは二の次だ。

「年寄りの冷や水だな。デスクワークでどれだけ体が鈍っているか、よおおおつく分かっただろう」

痣になりかけの殴られた痕ヘクールダウンスプレーを吹き付けながら、シェーンコップが言った。

「はいはい、良く分かりましたよ。もっと丁寧に扱っていただければありがたいんですがね」

「これぐらい怪我の内に入るか。それ、終わりだ。骨は折れてないし、頭も打っていない。重症患者よろしく病院のベッドに放り込ま

れたくなかったら、医者へ行くのは避けておけよ」

「分かってますよ。くしゃみ一つで肺炎あつかいされちゃ堪りませんからね。今は例の法案が成立するかどうかで、とても休んじやられないし」

そういうと、「寝たきり壮年皇帝」の代わりに帝国を切り盛りするので忙しい宰相閣下は、息子と同年代の青年にこだわりの無い笑顔を向けた。

「そんな訳で失礼するよ。悪かったね」

「い、いえ、とんでもありませんっ」

ケインが声まで鯨銚ばらせて答えた。皇帝の養子相手に取っ組みあってしまったと認識した時のショックから、ようやく復活したばかりだ。

「後はお任せしますよ。よろしく」

「ああ、任された。礼は後日改めて示して貰うからな」

了解と口にする代わりに軽く手を挙げて、ユリアン・ミンツは皇帝親衛隊隊長執務室を後にした。

閑話 適任検査 上（後書き）

同人誌 皇帝ヤンのお話完売しました。ありがとうございます。
手元に残った見本誌一冊。見事に落丁してまして、真っ白なペー
ジがあります。

なので、その部分をネット上で保存しとこうかと（笑）今回、閑話
という形で挿入させていただきます。

ところで、皇帝ヤンの治世が安定して一世代分の時間がたったら、
薔薇の騎士連隊の世間一般のイメージってどう変化してるんですよ
うね。

ケイン君の憧れが特殊なのか、それとも軍内部限定でありふれたも
のなのか、少年なら誰でも憧れているのか。

うーん、どれもありそうです。

適任検査 下

「さて、と。適任検査だが、格闘技に関しては省略して良いな。ユリアン相手に互角ならまあまあだ。ま、あいつが本気でお前を殺すつもりだったら、反撃できたかどうか怪しいもんだが」
分かり切ったことのように言われて、ケインは顔をしかめた。

「不服か」

「あ、いえ、そんなんじやありません」

うっかり帝国軍人にあるまじき口調になってしまい、益々焦りがつのってしまふ。

「隠すな。嘘を吐くなら、もっとうまくやれ」

……………何と答えていいのか分からない。

「相手の正体が不明なら出来るだけ生かして捕らえて情報を得る。こいつが鉄則だ。それに士官学校で習った格闘技なんぞ、実戦で使えなければ絵に描いた餅だと覚えておけ。お前、まだ人殺しは経験してないだろう。殺人の方法ってのは、教える事は出来ても早々実地訓練は出来んからな」

ぶっそう極まりないことを言っつて、ニヤリと笑う。完璧に位負けして、ケインは頷くことしかできなかった。

「まあ良い、それより、ここで働きたいなら一番重要な項目をテストしなきゃならん。覚悟は良いか」

「はいっ。勿論であります。自分は全力を尽くします」

気負いを込めたケインの返事に、シェーンコップは肩透かしを食らわせた。

「お前、三次元チエスは出来るか」

「は？」

「三次元チエスだ。聞いたことくらい有るだろう」

「はっ。あります。ルールは知っております。あまり経験が無く、下手でありますっ」

「そいつは気の毒に」

意味有り気なニヤニヤ笑いに、ケインは悪い予感を覚えた。

最終テストと言い渡されたそれは、「どの程度、平和の無為に耐えられるか」「退屈、平穩無事、のどかな日常の中で、いかに緊張と猜疑心を維持できるか」という、いかにもこじつけたとしか思えない理由付けが為されていた。

ちらちらと、対戦相手の姿を盗み見る。さっきから、もう二十分も長考中。この調子じゃ、夜が明けてしまうだろう。

まさか、皇帝ヤンの趣味が三次元チエスで、しかもヘボだったなんて。

あまりに信じがたい現実に、目眩がする。

「いやあ、助かるよ。みんな嫌がってね。相手が居なくなっ困ってたんだ。上手な相手だとすぐ負かされて終わっちゃうし、初心者だと真面目に相手してもらえてそれなりになるから」

嬉しそうに言われて、顔が引きつった。

そりゃあね、こんなにヘボじゃあ、勝ちを譲りたくても受け取ってもらえないし、さっさと終わらせるには負かしてしまうっしか無い

でしょうよ。

たった一度の対局で、悟りの境地に達したケインであった。

後日。

新入りの仕事が皇帝のチェスの相手と知って、ケインは薔薇の騎士への入隊を辞退しようと思案に考案た。いくら帝国地上部隊一のエリートとは言え……。

「だったら、お前の代わりを連れてくるんだな。皇帝ヤンの身辺警護をするんだ。それなりの技量の持ち主で、ついでに下手でいいから三次元チェスの出来る奴だ。分かったな」

かくして、今日もケインの悩みは続いている。

遊園地 前編

「今日はオフだ」

きつぱりと言った姿は、充分、凛々しく見えた。

二人の少年の目には。

「わーい、じゃ、ゆうえんちだー」

「ゆうえんち、ゆうえんちー」

びよこびよこ飛び跳ねて喜びを表す子供たちを前にして、ヤン・ウェンリーは、しばし父親の感慨にふけていた。

思い起こせば、ヤンの少年時代は特殊な環境だった。商人だった父に連れられて、星から星への宇宙船暮らし。休日に遊園地へ出かけるなんて、あまりに非現実すぎて思いつきもなかった。

息子達だって、ヤンに負けず劣らず特殊な環境で育っているが、それでも遊園地は同じ地上に存在している。

物理的に可能なんだから、出かけられないはずがない。どんな障害があるうと、今日は絶対に連れて行ってやるんだ。

少年時代の思い出は、少年時代にしかつけれないのだから。

「じゃ、行くうか」

ヤンは周囲の視線をキツパリ無視しながら、両手に二人の手をとって、皇宮の裏口へと向かった。

現在キスリング大將は、ヒルデガルド皇太后とアレク大公、それにグリューネワルト大公妃の警護を担当している。皇帝ヤンとその妻子担当のシェーンコップ大將とは、管轄が違う。とはいえ、同じ皇室警備、全く顔を合わせずに済ますことは不可能だ。それでも今回は特別だった。皇帝たつての希望で、『普通の休日』が演出されたからである。

「皇室専用車で乗り付けるなんて、御免だね。あくまでもプライベートな外出なんだから、無人タクシーを拾えば充分じゃないか。私と子供二人しか乗らないんだし」

言い出したらきかないところは、先帝ラインハルトと似たり寄ったりだろう。無人タクシーでは問題が有りすぎると説得して、ごくありふれた小型のランドカーに変更してもらうのがキスリングの限界だった。

小型ランドカーは親子三人で満席になる。結果として同乗出来なくなつたキスリングとシェーンコップ間で、後続先頭車の席取り合戦が起きた。

どちらも一歩も譲らず、すわ内部分裂かと思われた事態は、「二人一緒に乗れば良いじゃないか」との皇帝ヤンの一言で仲裁された。キスリングが、虫の好かない相手と面を突き合わせての忍耐力テストをする羽目になつたのは、そんな訳だ。

「なんだってこうも無茶をやらかすんだか」

面白がっているとしか思えない口調で言う同僚に、キスリングは

棘だらけの視線を向けた。それも一瞬で、すぐ前方のランドカーへ目を戻す。

「別に親子団欒をするなどは言わないが、危険分散くらいはしてもらいたいものだな。そう思わないか、貴官」

キスリングが顔を動かさずに答えた。

「卿は、真剣に任務を果たしたことがあるのか、シェーンコップ大將」

その程度の当てこすりで、凹むような皇帝親衛隊長ではない。

「無論、いつでも真剣だ。俺の上官は、昔から自己保存本能が希薄なのでね。これほどやりがいのある身边警護の対象も居ないだろうよ」

にやにやと応じる同僚に、キスリングはだんまりを決め込んだ。

相手になるだけ無駄だと、散々学習している。

「時々、ヤン・ウエンリーは自分が帝国一のVIPだということを忘れる癖があるんだ。別に健忘症は今に始まったことじゃないが、アレク大公とアーレ・ヤンは大事な皇太子候補だったことを忘れてい欲しいものだな」

「茶化して言うようなことか」

思わず怒鳴り返して、キスリングは乗せられたことに気付いた。

忌々しさを隠しもしないで、視線を前方へ戻す。

実際、ふざけている場合ではない。脳裏でもう一度、今日の手筈を確認する。

フェザーン中央パラダイスは、立体TVドラマのロケという口実で臨時休業させた。無論、皇帝ヤンの行幸があることは極秘だ。TVスタッフまで用意して、パラダイス側への偽装は完璧。

観客役のエキストラは、間違っても不審者を紛れ込ませてはなら

ない。全員が警備員と帝国軍人、およびその家族。大半の者は、福利厚生事業による家族サービスだと思っっているはずだ。

さらに老若男女をバランスよく配置したのは、皇帝ヤンに対する偽装だった。皇帝の御望みは、あくまで『普通』だからだ。

これだけの手配に要した一カ月余りを振り返って、あらためて気を引き締める。今日で最後、今日さえ乗り切れば、全ての苦勞が報われるのだ。

「しかし大袈裟な話だな。銀河帝国皇帝が一日出歩くだけでこの騒ぎか。旧王朝時代もこんなことをやっていたのか」

「卿だとて、元は帝国臣民だったのであるう。知らぬのか」

「生憎、俺はガキのころに亡命者って身分になったんでな。大人の世界の事情は知らん」

そうかとも言わず、キスリングは淡々と説明した。同情しているなどと思われるのは御免だし、無視して侮ったという印象をわざわざ与えることも無い。

「前王朝では、皇帝は滅多に皇宮の外へお出ましにはならぬもの。一旦行幸となれば、交通規制がひかれ、朝臣が競ってお供したものだ。外惑星への行幸には艦隊が付き従い、不審者、下層貧民、身体障害者、その他見苦しい者は全て逮捕拘束する騒ぎだった」

「ふーん、律儀だな、卿」

笑って言われて、キスリングは一声唸ると、堅く口を引き結んだ。

遊園地 後篇

「あれー、先輩、今日はどうしたんですかあ」

偽装ロケ隊の指揮をとっていたアッテンポローが、しらばっくれ
て言った。

密かに蒼くなったのは、勿論キスリング。

「あー、ダスティンおじさん、久しぶりです」

「久しぶりです」

双子よろしく声をそろえた子供達に、アッテンポローは破顔一笑
した。

「すごいなあ。ちょっと見ない間にどんどん大きくなってるじゃな
いか。伸び盛りだねえ」

大きくなるのが単純に嬉しい年頃だ。たちまちダスティ小父さん
に懐いてしまった。

「ねえ、ソフトクリーム食べようよ」

「食べよ、食べようよ、ねえ」

「はいはい、それじゃ、あっちのスタンドへ行こうな」

さつさと歩き出す元部下に、ヤンが訝しげに言った。

「良いのかい、仕事じゃなかったのか」

「ああ、良いんですよ。たまには現場に出ないと勘が狂うんでね。

本当は俺が居ない方が仕事はかどるだろうし。どうも、国营放送局
長室に大人しくおさまっているのは性に合わなくて」

いかにもアッテンポローらしい言い草に、ヤンはそれ以上の追及
をしなかった。

実のところ、真相に気付いているのか居ないのかは、シエーンコ

ツプにも分からなかった。恐ろしく鋭いかと思えば、信じられないほど鈍感だったりする人だから。

まあ、気付かれたところで痛くも痒くもない。要は、ヤン親子が休日を楽しめば良いだけのことだ。

シェーンコップほど開き直りきれないキスリングは、ハラハラしどうしで、数歩離れた位置からの警護を続けていた。

傍目にはほとんど分からないその緊張ぶりを目ざとくチェックしながら、胃を悪くしなけりゃ良いがなと、余計な心配をしてやるシェーンコップだった。

きょう、とうさんとアーレといっしょに、ゆうえんちへいきました。

ジェットコースターがおもしろかったです。

うちゅうせんシミュレーターもおもしろかったです。

ならんでまっているのがいちばんおもしろかったです。

はじめてあったしらないおんなのこと、いっばいおはなししました。

こんどは、おかあさまとアンネおばさまといっしょにきたいです。

そういつたら、キスリングがへんなかおをしていました。

おなかをおさえていたから、おなかがすいていたんだとおもいます。

ぼくのポップコーンをわけてあげたら、もっとへんなかおでわらっていました。

ソフトクリームもたべました。

ダスティおじさんがかってくれました。

またいきたいです。

グラム

アレクサンデル・ジークフリード・フォン・ローエン

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2565o/>

銀河英雄伝説異聞 皇帝ヤンのお話

2011年8月19日06時04分発行